ヘタリア世界名作童話劇場

陸点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヘタリア世界名作童話劇場

【Ｎコード】
Ｎ２２９４Ｐ

【作者名】
陸点

【あらすじ】
ヘタリアで名作童話を振り返ろう！　的な作品です。世界中の有名どころの童話をヘタキャラでパロディしました。基本的に残酷描写やグロいところはカットもしくは改変し、誰も死なないハッピーエンドとなっているので、お子様にも安心して読ませてあげて下さいｗ

第一話　白雪ギル　その一（前書き）

キャスト

白雪ギル：プロイセン

王様：フランス

魔法の鏡：スペイン

猟師：イタリア

通りすがりの肉屋：中国

第一話　白雪ギル　その一

昔むかし、あるところに。
銀髪赤眼で自意識過剰で自己中で、一人称が『俺様』な王子様がいました。
その名前はギルベルト。髪や肌がやたら白いので、白い雪のようなギルベルト、略して『白雪ギル』なんて呼ばれていたりもしました。ドイツ語ではギル・シュネーヴィットヘンといったところでしょうか。多分違うでしょうね。
さて、そんな白雪ギルは、やらなきゃいけない仕事を全てやたらムキムキした弟に任せ、自分はふらふらと放浪していました。よくいますよね、こういう迷惑な人。
家来は連れず、お供は途中で出会った小鳥が一羽のみ。無防備極まりない姿でしたが、何故か誰も彼を王子だと気づかないので問題ありませんでした。
そして、今日白雪ギルが立ち寄った国には、名君でしたが自らの美貌の為なら何でもしてしまう変わった王様がいました。
「鏡よ鏡よ鏡さん？　この国で一番美しいのは誰だい？」
その王様は毎日魔法の鏡にそういったことを訊き、いつも通り「王様です」と答えてもらうのが日課でした。
魔法の鏡は何故か関西弁で答えます。
「んー、この国で一番美しいのは確かに王様やけど、今日この国に来たばかりの白雪ギルが王様より少しだけイケメンのような気がするでー」
魔法の鏡のアバウトな回答に、しかし王様は激怒しました。
「何それ悔しい……！　もう、お兄さん嫉妬しちゃう！　そこの猟師、その白雪ギルってのをサクッと殺して来ちゃいなさい！」
王様はたまたま城を訪ねていた知り合いの猟師に、白雪ギルの暗殺を命じました。

「え、ええ～～っ！？　む、無理だよっ、俺ウサギだって殺せないのに～～っ！」
「お前もう猟師やめろ！」
あまりにヘタレな猟師に王様は、綺麗に飾りつけられた小箱を渡しました。
「この箱の中に白雪ギルの心臓を入れて持ってきなさい！　間違っても豚の心臓とかで誤魔化さないでね！」
王様、先の展開を読まないでください。
「は、は～い……」
こうして、ヘタレな猟師は白雪ギルの元へ向かいました。
「でも……俺その白雪ギルがいる所知らないし……どうしよう……？」
困った猟師が道をあてどなく歩いていると。
「おーれは白雪ギル♪　ガーキだいしょーお♪」（国民的青ロボアニメに出てくる音痴なジャイアントさんっぽく）
当の白雪ギルが自ら名乗りながら歩いてきました。
「わー、すっごくわかりやすーい」
思わぬ形で探す手間が省けた猟師は、早速猟銃を構えます。意外とやれば出来る子なのです。
「っわ！？　ちょ、やめろよ！　俺まだ死にたくねえ！」
いきなり銃口を向けられテンパる白雪ギル。ホールドアップして慌てふためくその姿は、仮にも一国の王子とは思えません。
「っ！　そうだ、やめてくれたら“俺様栄誉賞”やるからっ！」
「えっ、ほんと？　じゃあやめるよー」
訳のわからない賞で誤魔化される猟師。どうでもいいことですが、プロイセンＶｅｒのまるかいて地球の、「おーれーさーまえいよしょー、おーれにあーげよおー」のところのメロディーを聴くと、どうしても「きれいなあの子のはれすがたー」と続けたくなってしまうのは私だけでしょうか。
どうでもいいですね。

あっさり銃を下ろしてしまう猟師に、恐る恐る近づく白雪ギル。
「あーびっくりした……。なんだよ、なんでいきなりそんな物騒なもん向けてきたんだよ……」
「えーと、かくかくしかじかで――」
猟師は、白雪ギルに銃口を向けることになった理由を、あっちこっちに脱線しながらも説明しました。
「ふーん。その王様ってのが、イケメンすぎる俺様に嫉妬して、お前に俺様を殺すように命令したんだな」
自分で「イケメンすぎる」とか言っちゃいましたよ、この人。
「うん、大体そんな感じ」
残念すぎる王子様こと白雪ギルに、優しさか単につっこむのが面倒なだけなのか、猟師は何も否定しませんでした。
「んー、じゃあ早いうちにこの国を出たほうがいいのか？　ここ飯が美味えから長居したかったんだけどなー」
「あっ、じゃあ、王様は俺が適当に誤魔化しとくから、白雪ギルは好きなだけここにいなよ！　美味しいご飯出してくれるとこいっぱいあるし、女の子も可愛いんだよ～」
お国自慢を始める猟師に、白雪ギルは感激しました。
「いいのか！？　お前本当にいいヤツだな！　お前、名前なんていうんだ？」
「俺？　フェリシアーノだよ。フェリシアーノ・ヴァルガスっていうんだ」
「フェリシアーノ、『幸福』って意味か。いい名前だな。よっし、フェリシアーノちゃん！　困ったことがあったらいつでも俺に言ってくれよな！　じゃあな、また会おうぜ！」
なんだかちょっと古めの少年漫画なノリで去っていく白雪ギル。
そして、それをニコニコと見送る猟師ことフェリシアーノ。
「うん。気をつけてね～」
フェリシアーノは彼の姿が見えなくなるまで手を振り続けた後、王様をどうやって誤魔化すか考えました。

「うーん……王様は確かこの箱に白雪ギルの心臓を入れて持ってこいって言ってたから……何か別の動物の心臓で誤魔化せばいいのかな。でも、心臓なんてそう簡単に転がってないし……」
フェリシアーノがそこまで言いかけたとき。
「肉ー、豚肉はいらんかねー。ホルモンもカルビもたんとあるあるよー。心臓も腎臓も肝臓も、『臓』ってつく肉は大抵あるあるよー」
「あ、あった」
こうして、王様の危惧は当たってしまい。
王様の白雪ギル暗殺指令その一は見事失敗しましたとさ。

その二に続く

第一話　白雪ギル　その一（後書き）

というわけで始まりました、『ヘタリア世界名作童話劇場』です。あらすじでも書きましたが、この小説はヘタリアで名作童話を振り返ろう、という作品です。

といっても、ヘタリアキャラだけで完全再現は不可能なので、今回のように細部だけ変更したりします。

基本大筋は変えないつもりですが……オチは変えちゃうかもしれません。たとえばシンデレラ。あれ、シンデレラに意地悪してた継母たち、眼を潰されたり熱せられた鉄板で踊らされたり最後のほうにグロいことになるんですよね。いくらなんだってヘタキャラにそんな目に遇わせるわけにはいきませんから。

グリム童話のオチはホラー映画より怖いときがあるから侮れない。

それはさておき、記念すべき（？）第一話は白雪姫ならぬ白雪ギルです。

ヘタキャラには白雪姫ポジションにぴったりな女子が多すぎて、「もういいや、いっそ男にしよう」と考えた結果がこの人選です。白っていったらあいつしかいないし。

お妃様ポジションもあの人しかいないので王様に。ナルシストな人は大好きです。フランスももっとナルシストになればいいのに。

他の人も大体そんな感じです。チョイ役で中国が出てきたぐらい。あの仙人、物売りが妙に似合うんですよね。

えーと、そんなこんなで続いちゃう白雪ギルですが、次回はその続きと見せかけてシンデレラならぬ『ウクデレラ』をやろうかと思ってます。この作品は一話完結ではなくそれぞれ短編を連載させる、という形をとっていきます。

ウクデレラ……キャストは大体決まってるんですが、王子様役はまだ決まってません。いっそ白雪ギルに友情出演してもらいましょ

うか。

とにかく、最後まで読んでいただきありがとうございました。また読んでいただければ幸いです。

第二話　ウクデレラ　その一（前書き）

キャスト

ウクデレラ：ウクライナ

義弟：ロシア

義妹：ベラルーシ

通りすがりのブリ天：イギリス

元ネズミの馬（兄）：イタリア＝ロマーノ

元ネズミの馬（弟）：イタリア＝ヴェネチアーノ

元トカゲの御者：スペイン

第二話　ウクデレラ　その一

昔むかし、あるところに。
泣き虫でドジっ娘で友達のいない、だけど胸だけは人一倍恵まれた女の子がいました。
その名前はウクデレラ。やけに語呂の悪い名前ですが、“シンライナ”だとなんだか仮面ライダーが乗ってる電車みたいなのでウクデレラと呼んであげてください。
さて、そんなウクデレラには、血の繋がらない弟と妹がいました。
この二人の名前は……別に描写しなくてもいいですね。義弟義妹と書くことにします。
「姉さん、早くガス代払って」
「兄さん、家の掃除は姉さんに任せて私と結婚結婚結婚結婚」
この義弟義妹は、家事・掃除は全て義姉に任せ、自分たちはイチャついたり部下イビりしたり追いかけっこしたりしていたので、正直ウクデレラはキレても許されるレベルでしたが、何故かキレずに、
「あぁっ！　うっかりお皿割っちゃったぁ～～。イヴァンちゃん、ナターリヤちゃん、ドジなお姉ちゃんでごめんね～……」
とドジっ娘ぶりを遺憾なく発揮しつつ、義弟義妹と仲良く（？）暮らしていました。
そんなある日。
「イヴァンちゃん、ナターリヤちゃん、見て見て～～！　お城から舞踏会の招待状が届いたよぉ～～！」
この国の自称イケメン王子様が、いい歳して未だに結婚どころか彼女もいない残念な王子様だったので、困った家臣が「国中の裕福な家の娘&美しい娘を集めて、その中で王子が気に入った娘を妃にしてしまいましょう！」と一計を案じた結果、美人な二人の娘がいるウクデレラ家に招待状が届きました。
「あら、面白そうね。行きましょ、兄さん」

「え！？　でもここに『参加は女性のみ』って書かれてるけど……！？」
「私のパートナーは兄さん以外じゃ駄目なの！　じゃなきゃ今すぐ結婚結婚結婚結婚結婚結婚結婚……！」
「い、行くから落ち着いて！」
「イヴァンちゃんとナターリヤちゃん、仲がいいんだねぇ～」
　こうして舞踏会に出ることにしたウクデレラたちでしたが、一つ問題がありました。
　ウクデレラ家は貧乏なので、まともに着れるドレスは一着しかなかったのです。
「私は家で兄さんと結婚してるから姉さん行ってくればいいじゃない」
「結婚はしないけど……姉さん行ってきなよ。僕たちは留守番してるから」
　義弟義妹はそう言ってくれましたが、そこはお姉ちゃんなウクデレラ、
「いいよ、私は家で掃除しなくちゃいけないから……。イヴァンちゃん、ナターリヤちゃん、楽しんできてね」
　と、溢れんばかりのお姉ちゃん精神を発揮し、自ら留守番することを選びました。
「そう……じゃあ、行ってくるね」
「兄さんの部屋の扉のドアノブ壊しちゃったけど直さないでね」
「うん、いってらっしゃ～い」
　出かける二人を笑顔で見送ったウクデレラでしたが、本当は彼女も舞踏会へ行きたかったのです。
「あ～あ……私も、舞踏会に行きたかったなぁ……」
「そこで俺、ブリタニアエンジェルの登場だ！」
「きゃあっ！？」
　ウクデレラがため息をつきながら洗濯物を干していると、突然空から天使の格好をした極太眉毛の男が降りてきました。

「あ、あなたは一体……！？」
「俺は全ての迷える子羊の味方、ブリタニアエンジェルだ！」
なんの説明にもなっていませんでした。
「どうやらお前が困っているみたいだったからな。俺のとっておきの魔法でなんだって叶えてやるぞ」
なんてご都合主義な天使（の格好をした不審者）なんでしょうか。ウクデレラはここぞとばかりにドレスがないせいで舞踏会に行けなかったことを話しました。
「なるほど……つまりお前が舞踏会に行けるようにすればいいんだな？　この俺に任せておけ」
そう言うとブリタニアエンジェル、略してブリ天はどこからともかく先端に星のついた杖を取り出して、ウクデレラに向かって振りました。
「ほあた☆」
その一言で、今までウクデレラの来ていたシャツとオーバーオールが、白と青を基調とした美しいドレスに変貌しました。
「う、うわぁ～……」
「よし、お次は馬車と馬と御者だな。ほあた☆」
次にブリ天は、ウクデレラの家からカボチャを、野原で二匹のネズミとトカゲを捕まえてきて杖を振ります。
すると、カボチャは馬車に、ネズミはアホ毛が生えた馬に、トカゲはどことなくラテン顔な男に変身しました。
「うわ～！　兄ちゃん、俺たち馬になっちゃったよ～！？」
「な、なんだよこれ！　早く元に戻せよこのやろー！」
「わぁ、なんや俺、人間になってもうたわ～」
突然のことですから馬たちは大パニック。一方、御者は何故か平然としています。
「いいか？　お前らはこれから馬車を牽いてこいつを城まで連れて行くんだぞ。途中で止めたりしたら魔法は絶対に解けないからな」
と、ブリ天は馬＆御者にウクデレラを紹介しました。それまでぶ

ーぶー文句を言っていた馬はウクデレラを見て、
「わあ、君すっごい可愛いね～。今度俺とお茶しない？」
「そこのベッラ、これから俺とショッピングでもしませんか？」
と大喜び。御者も「こんな別嬪さんのお願いならしゃあないなあ」と満更でもなさそうです。
ともかく、これでほとんどの準備が終わりました。
後は……。
「……靴」
ウクデレラが自分の足元を見てそう呟きました。そう、服はドレスに変わりましたが、靴だけは変わらず泥の付いたブーツのままなのです。
「そうだ、忘れるところだった。えーと、確かここら辺に……」
ブリ天は何やらごそごそと何かを探し、やがてどこからかガラスでできた靴を取り出しました。
「靴だけは本物じゃなくちゃならないからな。ちょっと待ってろ、今サイズを調節するから」
杖の先でガラスの靴をこんこん叩くブリ天。それにしても、なんでこの人は靴を携帯していたんでしょうか。不思議ですね。
「うわぁ～ぴったり～」
サイズ調節したんだから当たり前だろ、というツッコミはなしでお願いします。
「良かったな。ところで、最後に一つだけ注意な」
ブリ天が喜ぶウクデレラに言いました。
「この魔法は夜の十二時、つまり午前零時には解けるからな。それまでには城を出ないと駄目だぞ」
そう言うとブリ天は、白い翼をばっさばっさと羽ばたいて空に舞い上がりました。
「天使さん、どうもありがとう！」
ウクデレラが飛んでいくブリ天に叫びましたが、果たして彼に聞こえたのでしょうか。ウクデレラの手に、彼の翼から落ちたであろ

う純白の羽根が舞い降りました。
こうしてウクデレラは、気の良い天使の粋な計らいによって舞踏会へ向かうことが出来たとさ。

その二に続く

第二話　ウクデレラ　その一（後書き）

というわけで『ウクデレラ　その一』でした。
なんかウクデレラがやたらモテてる気がしますが気のせいです。
気のせいなんです。

シンデレラといえば、アンデルセン版とグリム版でストーリーの細部が微妙に違うらしいですね。
アンデルセンではシンデレラに魔法をかけるのは妖精とからしいですが、グリムではなんかの木がシンデレラにドレスをプレゼントするらしいです。
例のグロいオチはグリムのほうだとか。
あと、義姉妹が履けない靴を履くために足の一部を（省略されました。詳しく知りたい場合はグロ覚悟でググってください。当方は責任を負いかねます。

妖精だか魔法使いだかの配役に起用したあいつは、そういう役が似合いすぎて逆に主役になれない予感がします。だって便利すぎるよあいつ。アーサー王伝説とかあいつ自身がアーサーなのにアーサー役がアメリカで自分はマーリンやってそうだよ。
まあ魔法使いが出てこないのなら主役張れるかも。アリスとかならいいかもしれない。不思議の国のイギリス。

あ、あと大抵は別の役になりますが、時々今回のように別の話の主役が友情出演したりすることがありますが、特に深い意味はありません。スターシステムとかそんなんです。

次回は白雪ギルの続きか、『三匹のバルト（元ネタ：三匹のこぶた）』、あるいは『青リボンちゃん（元ネタ：赤ずきんちゃん）』

のどれかをやろうかと思ってます。要するに、何も決まってません。

とにかく、今回も最後まで読んでいただきありがとうございました。また読んでいただければ幸いです。

第三話　三匹のバルト（前書き）

キャスト

長男豚トーリス：リトアニア

次男豚エドァルド：エストニア

末っ子豚：ラトビア

トーリスの友人：ポーランド

エドァルドの友人：フィンランド

狼：ロシア

妹狼：ベラルーシ

第三話　三匹のバルト

昔むかし、あるところに。
兄弟でもなんでもないのに、家が隣同士なのでいつもくっついてる三匹の豚がいました。
さて、この三匹の家は狼が住む大きな国の近くにあったのですが、近頃その狼の国が戦争をするとかで、毎日沢山の豚たちが兵隊として徴収されるようになりました。そこで、三匹は自分たちも徴兵されぬよう、遠くの国へ引っ越すことにしました。
「戦争が終わるまでは別々に暮らすことにしようよ。その方が狼に見つかりにくい」
三匹の少々頼りないリーダー役、以下トーリスがそのような提案をしました。
「それはいいですね。僕はトーリスに賛成です」
「僕もそれでいいと思います」
しっかり者次男なエドァルドや臆病な末っ子ライヴィスもそれに頷き、三匹はそれぞれ別々の場所で新しい生活を始めることになりました。
「……ふん、まだこんなところにも豚がいたのか。早く兄さんに知らせて、喜ばせよう……」
その相談を、一匹の狼が見ていることも知らずに……。

さて、狼の国から離れた場所で暮らすことにした三匹は、めいめい自分の家を作りだしました。
末っ子ライヴィスは農家から藁を貰ってきて、それで家を作ることにしました。
「きっと、暖かい家になるぞ」
が、家が完成して間もなくどこからか狼がやってきました。

「うふふ。ナターリヤの言う通り、本当にまだ豚さんが残ってたんだねぇ」
マフラーを巻いた大きな狼はゆっくりとライヴィスへ近づいてきます。ライヴィスは大慌てで家に閉じこもりました。
「うふ、そんなところに隠れても無駄だよ？」
ですが、所詮はただの藁の家。狼にあっという間に壊され、ライヴィスは捕まってしまいました。
「今日から君もうちの子だよっ♪」
「えーん助けてぇ～～～～」
こうして、ライヴィスは真っ先に狼の餌食になってしまいましたとさ。

「ライヴィスゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」
「どっどうしたのエドァルド！？」
時を同じく、ライヴィスの家から離れたエドァルドの家（予定地）。友人に建築を手伝っともらっていたエドァルドが突然奇声をあげました。
「あ、ああいや、なんかライヴィスが酷い目にあってるような気がして……」
恥ずかしそうに頭をかきながらも、手は釘を打つのを止めません。
エドァルドは友人から木材を分けてもらい、木の家を作っていました。いわゆるＤＩＹですね。
「今日はありがとう。凄く助かったよ」
「ううん、こういうのはお互い様だし。落ち着いたら、また携帯電話投げ大会しようね」
少し丸い体型の友人とそんな感じに青春した後、エドァルドはライヴィスが心配になり、新居で電話をかけることにしました。
プルルルル……プルルルル……。
「おかしいな、出ないぞ……？」

ところが、いくらコール音を鳴らしても一向にライヴィスは出ません。
プルルルル……プルルルル……。
「……？」
そのうち、エドァルドは不思議なことに気がつきました。コール音が二重に聴こえるのです。どこからか、コール音と同じリズムで電話の着信音が聴こえてくるのです。
そして、その音がどんどん近づいてくるのです。
そのとき、たてつけたたばかりのドアがノックされました。電話を片手に、背中にうっすら厭な汗をかきながらも、エドァルドはドアを開けました。
「はい、どなたでしょうか……」
「……うふふっ♪」
そこには、マフラーを巻いた大きな大きな狼がいました。呆然とするエドァルドに、狼は鳴り続けていた電話に出て、受話器に囁きました。
「……二人目、見ぃつけた♪」

次の日、友人がエドァルドを訪ねると、そこには家はなく、代わりに壊されたドアだけが転がっていました。

では、トーリスは一体どうしているのかというと……？
「ちょっとフェリクス、勝手に屋根をピンクにしないでよ」
「この方が可愛いし！　あと、壁はポニーを描けばいいと思うんよ」
トーリスは煉瓦で家を作っていました。
トーリスの友人も「手伝うし！」とやっては来たのですが、ほとんど遊んでばかりであまり役に立っていませんでした。
「……よし、やっと完成したよ。フェリクスのせいでかなり派手に

なっちゃったけど……」
「可愛いからよくない！？　それより、早く中に入るしー」
マイペースな友人にやれやれとかぶりを振りながらも、トーリスは出来たての我が家へ入りました。
「ほらここ！　ここの壁！　凄くない！？　ピンクの煉瓦でポニー作ったんよ！」
「うわっ、凄っ！　いつの間にそんなこと……」
出来たての我が家ではしゃいでいると、ふとトーリスの携帯が鳴りだしました。
「ん、誰だろ……エドァルド？」
トーリスが電話を取ると、やけに切羽詰まった様子のエドァルドがまくしたててきました。
『トーリス、そっちは無事なんですね！？』
「ど、どうしたのさエドァルド……？」
『説明してる暇はないんです！　いいですか、出来るだけ早くそこから離れて！　そっちに狼が向かってるんだ！』
「えっ！？　どういうこと！？」
何やら尋常ではないエドァルドの様子にトーリスは聞き返しますが、エドァルドは答えません。
『いいから早く！　うわ、もう追いついてきた……！　ごめん、もう切る！』
そう言って、エドァルドはぶっつりと電話を切ってしまいました。
「電話、誰からー？」
いつの間にかベッドに寝そべり動物番組を見ていた友人が訊ねます。
「うーん、エドァルドからだけど……どうしたんだろう？　早く逃げろとか、そんなこと言ってたけど……」
「じゃあ、逃げたほうがいいんじゃない？」
「でも僕は逃げてほしくないんだけどなぁ」
と、トーリスとその友人の会話に混じる声がありました。

壊された壁から、つるはしを片手に。
「……」
「……」
「……、やあ♪」
沈黙する二匹をよそに、狼はにっこりと笑います。
翌日、戦争の準備で慌ただしい狼軍の中には、三匹の豚の姿と、ちょうど家が一軒分建てられる量の木材と煉瓦があったとさ。

ソビ●トって怖いね、というお話です。

おしまい

第三話　三匹のバルト（後書き）

※うｐ主の都合により今回のあとがきはお休みさせていただきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2294p/

ヘタリア世界名作童話劇場

2011年1月24日18時25分発行